

【巻頭言】「やる気・世直し・手弁当」と福祉マイ ンド

著者	秋元 美世
雑誌名	東洋大学社会福祉研究
巻	13
ページ	1-1
発行年	2020-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00012188/

【巻頭言】

「やる気・世直し・手弁当」と福祉マインド

秋元 美世

「やる気・世直し・手弁当」というフレーズがある。ご存じの方も多いかと思うが、これはボランティアの意義や特質を言い表すものとして、よく引き合いに出されてきた言葉である。多少説明を付け加えておけば、「やる気」とは、自主性や自発性を示すもので、ボランティア活動が周りからの強制や義務として行うものではなく、自分で考え、自分で決め、自ら取り組んでこそそのものであることを意味する。また「世直し」とは、社会性や公益性をあらわしており、貧困や格差などの社会の問題にも目を向けようというものであり、「手弁当」というのは、行為に対する経済的な利益や対価を求めないということの意味している。ただ、あらためて考えてみればこれらの事柄は、なにもボランティア活動に限った特質ということだけではなく、程度の差はあれ、社会福祉に携わる者にとって共通して求められる事柄、あるいは社会福祉の営みを社会福祉たらしめている特質を言い表している言葉とも言えそうである。その意味で、法に携わる者に求められるとされる「リーガルマインド」になぞらえて、「福祉マインド」というものを考えるとすれば、「やる気・世直し・手弁当」というのはまさにそれにあたるものと言えるのかも知れない。もちろん、どのような形で福祉に携わるのかによって、「やる気・世直し・手弁当」のそれぞれが、実際に持つ意味合いにも違いが出てくるだろう。たとえばボランティアとしてかかわる場合と異なり、福祉の専門職として携わる場合には、「手弁当」の意味合いは異なってくるだろう。ただ、「医は仁術」という言葉があるのと同じように、福祉の専門職には経済的な対価や利益とは異なる価値を持つことが求められている。実際、福祉の専門職による「プロボノ活動」（自身の専門性を活かして行う社会貢献活動）に社会的な関心が寄せられたりもしている。

さて、それでは福祉の研究に携わる者についてはどうだろう。私たちが現在直面している社会状況を踏まえるならば、私個人の思いとしては「世直し」の側面での貢献が強く求められているのではないかと感じている。「withコロナ」の社会で、私たちには新たな生活様式とそれを支える社会システムをつくっていくことが求められている。そしておそらくこの新たな社会のシステムづくりという問題は、20世紀の2つの世界大戦とともに生じた大きな社会の変動と転換の中で求められていた課題に匹敵するような事柄であるとも言えそうである。当事の社会福祉や社会保障の研究者たちは、そうした課題に対してまさに「世直し」という福祉マインドを抱いて「福祉国家」の青写真を提示した。「withコロナ」という大きな社会変動の中で社会福祉の研究者には、同じように「世直し」という福祉マインドを持って、新たな生活様式と社会システムのあり方にかかわる問題にアプローチしていくことが求められているのではないだろうか。